

*A Gift of
Wings*



翼の贈物

リチャード・バック

新庄哲夫 訳

イラスト K.O.エックランド

Richard Bach
A Gift of
Wings

新潮社版



A GIFT OF WINGS: Richard Bach
Original Copyright: Dell Publishing Co., Inc.
This book is published in Japan by arrangement
with Dell Publishing Co., Inc. through Charles E. Tuttle Co., Inc.

つばさ おくりもの
翼の贈物

リチャード・バック しんじょうてつお 新庄 哲夫 訳

印刷 1975. 2. 20

発行 1975. 2. 25

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社 東京都新宿区矢来町71/振替東京4-808 / 千162

電話 業務部 (03) 266-5111 編集部 (03) 266-5411

定価 780円

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© Tetsuo Shinjo, 1975 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

翼の贈物・目次

十秒の間がある 7

空飛ぶ人々 16

私は風の音を聴いていない 28

願いごと 34

消えたパイロットの帰還 40

常に空はある 55

過去から来た女 60

空からの眺め 76

猫 81

雪と恐竜 101

ラガーディア飛行場でのパーティー 107

サム福音書 122

ペカトニカの淑女 128

カモメはどうかしている 134

闇の中の声 139

本日、巡業飛行中 145

ひとかけらの土地 161

完全なる場所への旅 167

寝椅子の下にあるもの 173

七万一千ドルの寝袋 179

午後の死——ある滑翔物語 185

飛行場少年への贈物 201

エジプト人はいつの日か飛ぶ 209

楽園は自ら造るもの 214

わが家は他の惑星 220

空飛ぶサマーハウスの冒険 226

編者の言葉 241

解説 242

翼
の
贈
物



十秒の間がある

朝、目がさめて、前夜に見た夢の中身を思い出すのに十秒の間があるといわれる。眼を閉じたまま、暗闇の中で夢のきれはしやかけらをかき集めながら、自分は一体どんな人生を夢見たのか、また夢見る自分が目覚めた自分に一体何を語りかけようとしているのか、といったようなことを探し出すわけだ。

私はしばらくの間、それを試してみたことがある。目がさめたとたんに、枕もとに置いてある電池を使用した小型テープレコーダーに夢の模様を吹き込むのだ。うまくいかなかった。前

夜に夢見たことは、確かに数秒間は覚えていたのである。ところがあとで、いざ吹込みを再生してみると、何をしゃべっているのかついぞ理解できなかった。奇妙にしわがれた陰にこもる声しか聴えて来ないのだ。何か納骨堂のドアがたてるうつろで、古めかしい音だった、あたかも眠りが死そのものでもあったかのように。

ペンと紙のほうがうまくいった。そしてすでに書いた文章の上に重ね書きするような真似をしなくなると、決して眠りにつかないわが身の一部分の働きを知るようになった。夢の国では山また山、飛行に次ぐ飛行、たくさんの学校、高い断崖に打ち寄せる大波小波、そして奇妙なとるに足りぬ事などがごっそり現われる。それから時たま、とくに過ぎ去ってしまったか、あるいはこれからやって来るかもしれないぬ人生の出来事といったあの稀な一瞬が訪れる。

ほどなくして、私はわが来し方が夢のまた夢で、忘れ去ったも同然だということに気づく。先週の水曜日、いや、先週の土曜の出来事すら思い出せなくなったとき、私は昼夜にわたる日記をつけはじめた。長い間、自分は人生の大半を忘れ去ったのではないかと心配したのであった。

しかし、いくつかボール箱にたまった文章を集めて、この十五年間に書いた自分の好きな一番いい作品を一本にまとめてみると、結局、自分はさほど過去を忘れてしまったわけではないと気づいた。悲しい時も楽しい時も、大空を飛んでいる最中に不思議なファンタジーにみまわれると、私はそれを文章にしたのであった——日記にしたための代りに物語やエッセイに仕立

てたのであるが、それは全部で数百編にのぼった。はじめてタイプライターを買い入れたとき、私は自分にかかり合いのないこと、わが人生に重大な影響を及ぼさないことはいっさい書くまいと誓ったのだった。われながら、この約束をなんとかよく守ってきたように思う。

しかし、本書にはさほどうまく書かれていない文章もある——たとえば、雑誌に売った最初の小品『カモメはどうかしている』と『私は風の音を聴いていない』とは、書直しの衝動を制するためにペンを放り投げなければならなかった。ここに初期の作品が収録されているのは、初心者にとって何か大切なものが、ぎこちない文章にもうかがえるからである。また当人の到達した思想には何らかの教訓と、おそらくはあわれな男にとってのほくそ笑みとがあるからだ。担保のフォード車を取り戻した年の初めに、私はカレンダーの四角い余白に自分宛のメモをしたためておいた、はるか未来のリチャード・バックがみつけられるようにと。

今日までよくぞ生き永らえて来たものだ。奇蹟が必要だったようにみえるぞ。

『かもめのジョナサン』を出版できたか。映画を製作したか。

まだ目鼻もつかぬ新しい計画は何か。以前より万事がまして、幸福か。

かねてのわが懸念をどう考えるか。

——一九六八年三月二十二日RB——

煙草を吹かしながら姿を現わし、これらの質問に答えたとしても、遅すぎはしないだろう。

お前が生き永らえられたのは、闘いがさほど面白くなくても、途中で投げ出すのをやめたからだ……それが唯一の必要な奇蹟であった。そう、ジョナサンはついに陽の目を見たよ。映画の計画や、お前が夢にも考えなかった他のことも緒についたばかりだ。どうか余計な心配をしたり、びくびくしたりして時間を無駄にしないように。

天使はいつも、こんな口のきき方をするものだ、やきもきするな、恐れるな、何もかもうまくいく、と。『当時の自分』は、きつと『現在の自分』に顔をしかめてみせることだろう。『言うはやすし、が、いまの俺は食いものが無くなりかけてるし、おまけに火曜日から文無しなんだぜ！』

しかし、案外そうでないかもしれない。末頼もしくは、信頼のおける人物だったから。ある点までは。もし用語や段落の手直し、刈込みや新たな書込みをすすめるものなら、彼は私のほうこそ迷いが生じないうちに、どうか早々に未来へもどってくれ、自分の言わんとするところを表現する方法は自分なりにちゃんとわきまえているつもりだと答えるかもしれない。

古来の格言によると、プロの作家というのは、ついに筆を捨てなかったアマチュアなのだそうである。何となく他の仕事で長続きしないからだろう、ぎこちない初心者が途中で筆を捨てきれないアマチュアとなり、現在に及んでいるのは。私はついぞ自分のことをいっぱしの作家として、インクの文字に人生を賭ける複雑な魂の持主として考えたことはない。実のところ、私が文章を書ける唯一の場合といったら、ある着想が激しく燃えさかったあぐく、自分の首根っこをつかんでぶちのめし、金切り声をあげながらタイプライターのところへ自分を引きずって行くときだ。その途中で、私は床の上に踵の跡や、壁には爪のひっかかり跡を残す。

本書の文章には、仕上げるのに時間がかかりすぎたものもある。たとえば『神を畏れる男^{オオカミ}たちの手紙』(訳注・解説参照)は三カ年の歳月を要した。私はなんども手をつけたのである、ともかくも書いておかねばならぬ、大切なことが山ほどある、この作品で語る必要があるのだと心得ながら。いざタイプライターに向うと、身のまわりにまるめた紙屑の山を築くのが関の山だった、映画などで小説家がそうするように。私は歯ぎしりし、うめき声を発しながら立ち上り、ベッドの枕を抱え込んで、新しいノートブックに手書きをはじめ。難しい文章を書く場合には時として効き目のある手だ。ところが、飛行信仰の観念が鉛筆の先からとめどなくほとばしり出て、書出しの調子は十倍も重苦しいものになってしまふ。私はがさつな言葉を口走り、紙切れをばりばりとまるめるのだ、莊重な悪文をまるめてノートブックの紙切れ並にぽいと壁へ投げつけたほうがましでもあるかのように。

しかし、やがてものになる日がついにやって来る。うまく運ぶようにしてくれたのは石鹼工場の連中だった——どこからともなく現われた第三処理場の作業員ぬきでは、物語もまだどこやらの壁のすそ板あたりに横たわるしぼんだボールみたいなものであったろう。

文章を書く上での難事は物語自らに語らせることだ、という点を学ぶまでに時間がかかった。タイプライターの前に坐っている間、できるだけ考え事はしないということである。それはくり返し、何回となく起る事態であり、初心者はそうして学ぶものである——ある着想をあれこれ考え込み、キーをたたくスピードもにぶって来ると、文章はだんだんと悪くなっていく。

たとえば『ケネディ空港漫歩』（訳注「解説参照」）という一文が脳裡に浮ぶ。気が狂いそうになるところまで追い込まれたのは、この物語においてであり、もともとは単行本として計画したものだ。『神を畏れる男からの手紙』と同じように、言葉はたえずとらえがたい、じめついた退屈さに舞いもどっていった。あらゆる種類の数字や統計が次々と現われ続けたのである。このような状態が一年近く続いた。来る日も来る日も、巨大なサーカス空港であらゆる見世物を見物しながら、鞆はポップコーンのような調査書や綿飴のようなメモをしたためた手帖で一杯になった。そして何もかも、紙の上では灰色のがらくたに変じてしまった。

あげくのはて、出版社の求めるものなどどうでもよい、自分の求めているものなどどうでもよい、ただまっしぐらに進むだけだ、愚直になって何もかも忘れ、ただ書きまくるだけを心がけようと決意したとき、はじめて物語は目を開き、自然と回転し出したのであった。

この物語は単行本として拒否された。編集者は、背番号もつけないでグラウンドを突進するようなものだともたのである。が、「エア・プログレス」誌は即座にそれを活字にしてくれた——小説でも評論でもエッセイでもなかったのに。私がそのラウンドで勝ったのか敗けたのかわからない。

雑誌に愛だの不安だの教訓だのを発表する者は、内なる秘密に別れを告げて、それを社会に提供する。『彼らの仲間になる愉しみ』（訳注「解説参照」）を書いたとき、この別れの一側面は簡単、かつ明解なものであった。「作家を知る方法は本人に会うことではない、彼の書いたものを読むことである」物語は突如、何かを悟って紙の上に自らを展開する……私のもっとも親しい友人の中には、決してめぐりあうことのない人たちもいるのだ。

この内なる秘密に別れを告げる場合のいま一つの側面は、それと気づくまでに数年を要した。たとえば空港で、あなたのことにかけては兄弟のことよりも詳しい読者に声をかけられたら、一体何と答えるべきか。信じがたいことだけれど、自分の内的生活は一台のタイプライター、あるいは一枚の紙切れでなく、実は時たま姿を見せて挨拶する生活者に託しているのだということであった。空とかアルミニウムとか、夜はもの静かな場所といった孤独なものを愛する者にとって、これは必ずしも面白いことではない。常にもの静かな見えざる場所であったはずの「ハイ・ゼア……」（訳注「「こんにちは」と「高所」という二重の意味を持つ」）も、どんな善意から発せられようと、何となくおっかないものだ。

いまの私にとって、その人柄を愛するようになったネヴィル・シュート（訳注『渚にて』の作者）かアントワヌ・サン・テグジュペリか二十三歳で戦死した操縦士バート・スタイルズ（訳注『巨鳥へのセレナーデ』の作者）に電話をかけたたりするのが遅すぎたのはありがたいと思う。称讃の言葉で彼らをおびえさせた上、当方の押しつけがましさを防ぐためにご愛読頂いてありがとうといった壁を作らせるのが落ちだから。いまのほうが、彼らをむしろよく理解しているつもりだ。彼らと一度も口をきいたことがないし、ついぞ書店でのサイン会などでお目にかかったこともないからである。『彼らの仲間になる愉しみ』を書いたとき、私はこの点にまだ気づいていなかったが、これは決して悲しむべきことではない……新しい真実は、継目やきしみ無しで古い真実と合致するものだ。

本書に収録された文章は、大半がかつて専門誌に掲載されたことがある。数千の人たちが一読して捨て去ったか、ひと山に束ねてポイスカウトの古雑誌・古新聞回収運動に寄付したかもしれない。雑誌原稿はうたかたの世界だ。その生命は、蜂螫の短い寿命と同じくはかないものである。こうした死は、活字に値するような物語とはならない。

私の文章としては、最高の「紙の子」らがここに集めてある。数トンの紙屑の下から救い出され、炎と煙の間から助け出されて息を吹き返し、まさに城壁の上から飛び降りようとしているのだ。それも、飛ぶのが楽しいことだと信じているからである。今日、私はそれらを読み返してみる。人気のない部屋でわが声が聞えて来る。「リチャード、すばらしい話があるじゃない